

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 5月 9日現在

機関番号：37113

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720413

研究課題名（和文） 現代演劇の消費空間と大都市集積に関する研究

研究課題名（英文） The study of consumption spaces and agglomeration of contemporary performance art on Tokyo

研究代表者

山本 健太（YAMAMOTO KENTA）

九州国際大学・経済学部・准教授

研究者番号：40598190

研究成果の概要（和文）：

本研究は、現代演劇、とりわけ小劇場演劇に着目して、その流通、消費の空間分布から当該文化産業の大都市集積の構造と大都市の文化創造機能について明らかにしたものである。小劇場演劇が東京において発展し、また多くの劇団が東京で活動している要因の一つとして、観劇者による公演前後の文化施設のハンゴ行動が明らかになった。下北沢地域が、近接地域を含む文化活動の集積や相互作用によって、サブカルチャーを中心とした都市型文化産業の核心地域となっていた。

研究成果の概要（英文）：

This study focuses on contemporary performance art, especially small theater performances, details its agglomeration structure in Tokyo and demonstrates the cultural creative function of the metropolis. A factor contributing to agglomeration and the development of small theater performances in Tokyo is that many audience members' behaviors are similar to those of bar-hoppers. Some audience members patronize cultural institutions located around theaters before or after performances. And, for this reason, Shimokitazawa has become one of the core districts for urban subcultural industries because of these audiences and institutions located around the western part of the Yamanote Line.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：

キーワード：都市地理学 文化産業 集積 演劇 観劇者 消費者行動 文化施設

1. 研究開始当初の背景

1980年代に都市化を世界経済との関連で捉える必要性を指摘し（Friedmann and Wolff, 1982）、世界都市仮説を提起したFriedmann（1986）は大都市のもつ副次的機能として文化、情報の創造、発信機能を示し、それら機能の大都市への集中を示唆した。先進国大都市はグローバルな経済構造の中であって、管理機能、サービス、情報のみならず、文化の主要な発信基地として位置づけら

れている（Pratt, 1997; スロスビー, 2002; Scott, 2000）。原など（2003）はこれら都市型の文化産業への関心の増大に触れて、「経済活動が文化的側面に規定されていることを議論していることに対し、逆に文化も経済システムの中で生産され流通・消費していることをコインの表裏として明らかにする必要性」（原など, 2003, p.234）から起こったものと説明している。都市型の文化産業のひとつであるコンテンツ産業においては、地理

学を中心として、集積の構造に関する実証的研究が蓄積されつつある（小長谷・富沢，1999；Scott，2000；Power，2002；原ほか，2003；半澤，2001；2005 など）。

これら都市型の文化産業の特性に関する既存研究を整理すると、次の2点が指摘できる。すなわち、(1)生産工程において高度に分業体制が発達していること（日本政策投資銀行，2006；Miller and Leger，2001；Elmer and Gasher，2005 など）、(2)個人の能力と人的つながりといったネットワークが不安定な労働市場を支えていることである（Coe，2000；山下，2000；増淵，2005；山本，2007 など）。上記を鑑み、応募者はこれまで、アニメーション産業を対象として、企業間取引と労働市場の側面から、当該産業の大都市集積のメカニズムを明らかにしてきた（山本2007；2008；2009）。

しかしこれら先行研究の多くは、文化産業が特定の大都市に集積することを指摘しながらも、その分析視点は、アニメや映画といった当該産業生産物がどのような分業構造の下で生み出されるのか、企業や労働者といった生産サイドに注目したものであった。文化的生産物が、大都市の中でどのように消費されるのか、またどのように地域へと流通していくのか、踏み込んだ議論はなされていない。すなわち、文化的生産物の生産の側面のみならず、流通や消費の側面からも、文化的生産物と都市空間との関係を論じることが求められているのである。

以上より、本研究は、現代大都市における成長産業である都市型の文化産業の一つである現代演劇に着目して、流通、消費の側面から当該産業の大都市集積の構造について明らかにすることを目的とする。

国内地理学分野において、文化産業としての演劇を扱った研究は多くない。そのなかでも先進的なものとして、阿部（1992）の研究がある。そこでは、来日外国人アーティストの公演日程の分析から、非経済的魅力的点で国内都市階層における東京の地位の高さが示された。他方、演劇と都市の内部構造、さらには空間構造のダイナミズムにまで踏み込んだ議論は管見の限りみられない。

2. 研究の目的

本研究は、文化的生産物の生産の側面のみならず、流通や消費の側面からも、都市空間との関係を論じることが求められていることを踏まえ、東京をフィールドとして、現代演劇に着目して、その流通、消費の空間分布から当該文化産業の大都市集積の構造と大都市の文化創造機能について明らかにすることを目的とする。その際、1980年代以降の劇場と劇団、観劇者の空間分布に注目して、大都市内部に形成されている文化の消費空

間の構造とその変化についても分析を加える。本研究は、現代演劇が大衆化した1980年代から現在までの東京都市圏における現代演劇、とりわけ小劇場演劇の公演数や公演地、小劇場演劇を消費する観劇者の特徴を明らかにし、文化の消費空間と都市空間構造との関係を示すことで、当該産業が大都市に集積する要因を明らかにするものである。

3. 研究の方法

第一に、既存資料を用いて首都圏に立地する劇場での公演劇団数、公演日数の経年変化を把握し、東京における小劇場演劇の消費空間の変遷を捉える。第二に、小劇場演劇の観劇者の社会属性や行動特性を把握することにより、現在の小劇場演劇の消費空間がどのような構造になっているのか明らかにする。第三に、これらふたつの側面から得た定性的、定量的データの分析を通して、小劇場演劇の消費空間と東京の空間構造の相互の影響を示す。その上で、小劇場演劇を演じる劇団や生産物である作品が東京内部で再生産され、集積が強化される構造を明らかにする。

4. 研究成果

研究の詳細な結果については、山本・久木元（2013）を参照することとし、成果の概略について、当該論文の記述を元に記載する。

本研究では、まず、雑誌に記載されている公演情報を用いて、東京における小劇場演劇の公演場所の分布を示した。これまでの研究では、一時点における都市空間構造について示しているが、本研究では、さらに時間軸を設けて、大都市内部における文化消費の場の時代的な変遷にまで言及した。

1990～2000年には、山手線内側における公演の減少と、山手線西側沿線および以西における公演の増加という傾向が認められた。また、公演地は特定の劇場に集中する傾向がみられた。公演日数には季節性があり、1年の中でも特に10月前後で最も多くの公演がなされていることがわかった。このように公演日に季節性がみられる背景には、公的機関や財団による助成の申請期限の存在が示唆された。ただしこの点については、個々の劇団の運営状況について、より詳細な実態調査の蓄積が求められる。

観劇者を対象としたアンケート調査の結果からは、消費者が周辺地域の文化施設をハンゴするという特徴的な消費行動が確認された。このようなハンゴ行動は、渋谷や下北沢を中心に立地する、ライブ会場や映画館などの隣接文化産業施設との近接性によって支えられている。これらの地域は、1990年代以降の小劇場演劇の公演地分布の分析でも多数の公演が集中している地域であり、小劇場演劇の中心地であったことはすでに多数

の既存研究で指摘されたとおりである。

また本研究では、観劇者の観劇前後の消費活動にも着目することで、下北沢地域が、近接地域を含む文化活動の集積や相互作用によって、映画や音楽、現代演劇などの、主にサブカルチャーを中心とした都市型文化産業の核心地域となっていることを明らかにした。観劇者にとって、東京圏は多様な演劇公演を選択できる地域であるとともに、映画や音楽といった隣接文化にもアクセス可能な地域であるといえる。これは、東京圏外居住の観劇者が長距離移動を伴う観劇活動に至るインセンティブの1つとなっている可能性がある。このことは、東京大都市圏における都市型文化産業の支持基盤の一環として、観劇者への詳細なインタビューを通じて理解される必要があるだろう。

劇場支援組織を有する公演会場の場合、観劇者の中には、観劇理由として当該劇場が会場であることを挙げる支援会員が少なからず存在していた。このような支援会員の回答からは、劇場運営者の「演劇を観る目」に対する信頼が垣間見える。

加えて、「ファン」の存在もまた当該文化の生産の支援者として大きな影響を与えることが示唆された。このようなファンの中には、日常的に東京で観劇することが困難な地域に居住するものもいる。公演情報の入手には、劇場で配布される「チラシ」が重要な役割を果たしているが、公演数の少ない東京圏外ではそうしたチラシを入手することが難しい。その結果、東京圏外に居住するファンは、ダイレクトメールやインターネット・ホームページなどの多様な情報源に積極的にアクセスし、東京圏居住者との間の情報取得の機会格差を克服していた。

同時に、観劇者の中で芸術関連の高等教育を経験した者や、現在芸術関連の職種にある、いわゆる「玄人」客の数が無視できない規模となっている点も注目される。これらの玄人客はサブカルチャーを含む芸術について一定の素養があり、「Twitter」などの短文ブログやSNSを活用して、即時性に富んだ公演情報や多様な観点からの評論を発信する者もある。本研究でも、「SNS」の利用は全体の10%程度あり、観客がこれらSNSから獲得している情報のなかには、上記のような玄人客の発信した情報を参考にしていることが推察される。このような観劇者が多く存在することは、芸術系大学の立地)や芸術系職種の雇用機会)が大都市に集中していること、ひいてはこの種の文化産業の生産、消費の場が東京に極度の集積を見せることと無関係ではない。こうした観客層の厚さは、小劇場演劇が大都市を中心として展開してきた要因の一つであろう。

他方、競争が激しく作品人気の盛衰も早い

演劇市場の状況に対して、聞き取り調査では、「ここ数年では、そのような市場動向を嫌い、作品とじっくり向き合い、のびのび作ることができる環境を求めて、地方に出ていく中堅や、そのようなリーダーを追いかけていく若手もいる」との指摘を得た。この指摘からは、地方圏において、東京とは異なる演劇活動の姿と、市場構造が形成されつつあることが示唆される。今後はこのような地方圏における演劇の在り方についても視野を広げ、東京における調査との比較検討を通して、演劇という文化産業における供給と消費の局面をとらえていくことが求められよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

(1) 山本健太、久木元美琴、東京における小劇場演劇の空間構造、都市地理学、査読有、8巻、2013、(印刷中)

(2) Kenta Yamamoto、Changes to the Consumption Space of Small Theater Performances in Tokyo, Science Reports of Tohoku University 7th Series(Geography)、査読有、58巻、2012、pp.27-38

[学会発表] (計5件)

(1) Kenta YAMAMOTO, The Characteristics of the Consumption Space of Small Theater Performances in Tokyo. 7th China-Japan-Korea Joint Conference on Geography. 2012/8/5. Northeast Normal University, Changchun, China.

(2) 山本健太、神谷裕夫、地方に拠点を置く芸能団体のマーケットと客層、東北地理学会2012年春季大会、2012年5月26日、仙台戦災復興記念館

(3) 山本健太、久木元美琴、東京における小劇場演劇観劇者の行動特性—劇場Aにおける劇団Hの公演を事例として—、日本地理学会2012年春季学術大会、2012年3月28日、首都大学東京

(4) Kenta YAMAMOTO, Changes to the consumption space of small theater performances after the 1980's in Tokyo. 6th Korea-China-Japan Joint Conference on Geography. 2011/11/7. Seoul University, Seoul, Korea.

(5) 山本健太、神谷浩夫、地方縁辺地域におけるプロ芸能団体の存立基盤—佐渡「鼓童」の事例—、東北地理学会2011年春季大会2011年5月15日、仙台戦災復興記念館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 健太 (YAMAMOTO KENTA)

九州国際大学・経済学部・准教授

研究者番号：40598190

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：